特11
9

序文

強いものゝ日本の軍隊、弱いものゝ豚尾漢の兵隊と、世界萬國相搖の定まったる樣なれ、ケレども彼の豚兵を視ること豚の尻尾の如く、慈姑の如く、天狗子の化身の如く、一種の動物視して以て更ゐ人間界ゐ在るものとゝ思はざるなり、嗚呼チャン〳〵の價値大下落して今ゝ三文に買ふものも出さるゝ、實よ氣の毒千万ある哉、然れとも之よ反し日に月よ盛んにして流行を來し價値の出たるものゝチャン〳〵征伐滑稽歌の類なり、此に於て豚的も少しく補ひを得たり、頃日開文堂の主人來りチャン〳〵征伐の滑稽を編てよと請ふ予肯諾たるとも特に新奇の妙案もなしさりとて辞むことも奇りがたければ晩酌の微醉ゐ乘と出鱈目、出放題上下の顯をはゞまして御笑しまゝ呆痴陀羅經と吐鳴立

うることゝなりぬ

明治廿八年立春

○目次

○東蒲塞征伐滅茶々々經
○其二
○阿武久陀羅渤海經
○弱虫屁子垂經
○黄海阿陀佛經
○東蒲塞羅經
○分捕經
○豚尾漢泣虫經
○悪魔退治蔑黙經
○豚狩阿房陀羅經
○馬鹿般若馬鹿見多經

以上

文中○印のある處ハ（ポク〳〵）と木魚をたゝく處なり

第11
9

支那征伐 呆痴陀羅經

夢廼舎現著

東蒲塞征伐滅茶々々〳〵々々經

恐れ多くも一寸喋くる御經の文句ハ、是を何よと申さ體なくも一寸出て一寸死ぬお支那の山出し。ぢし〳〵やらかせうならば東蒲塞征伐滅茶々々戦の一部始終を説きたる經文釋迦も阿彌陀も知らない利益有難涙をとぼすかぞふだか、そんな事搾はぬ。一寸來て一寸逃げ、一寸出て一寸死ぬお支那の山出し。ぢし〳〵やらかせ大砲どん〳〵閃き渡るは劒の電光東蒲塞の立割り絲瓜の胴切、十羽處か万羽も一束勝ま乗たる日本の軍勢、其又勇氣の鋭ん鬼神、突出す尖先霜より寒いぞ、韋駄天走りに逃てもは叶ぬ。大連旅順の砲臺砦も、ゆらり〳〵と海鼠となつたぞ海城占めたり蓋平取たり奉天府城も片手に掴

へた。今ゐ見あせへ萬里の長城へたりと倒して北京へ乗込み、愛親覺羅が孫彦やとや子の東蒲塞の末生、腸ゐくつて爲にさらはせ、序にもぎ取る天津唐茄子、横腹蹴破り臓腑を引出し、魚の餌食ゐしたらばよかろと相談極つて押へた處が、腐つた唐茄子鼻持ならねへ、夫もさうだが捨て置たら臭氣が溜り虎列拉が流行ると皆さん迷惑、撲滅手段を取らねばならない日本の義務とい下さる事でもあるめへけれども、浮世の義理ゐは片肌脱がねばならない始末だ。兄さも弟もそく〳〵やらかせ攻城砲でも榴霰弾でも何でも搆はぬ、音さへさせれば魂消る奴等だ。時に軍艦定遠なんぞい何處に隠れて縮んで居るのか、聞けば威海の奥底づまりゐ藥鑵の茹蛸、手足も出されぬ尖り口して青息吹てる事といどぬぞへ。一番尻から大砲こき出し、討て占るも退屈紛れだ。ソコヲのー〳〵上つた一隊、威海の砦の後へ廻りて、どし〳〵やらかせ。其間ゐ天津旋風が捲くぞよ、北京の建物がぐらりと音して、地震と雷、火事い始る老爺いくたばる。東蒲塞の死骸い龍宮へ投込み、鯨や鯨がたらふくせしめて、腹ゐ下ろが胃病ゐ發ろが夫迄搆つちやましよくに合いねへ。處で亞細亞い此方の物ざが、不毛の地面い取た處ゐ肥料ゐ費だ。旅順と大連威海ゐ芝罘、臺灣福州上海なんぞは取ても遣ふゐ、其他の處い突て碎いて團子ゐ丸めて茶菓子とやらかし、屁玉と化して飛せて仕舞ふも朝飯前だよ。ゐ金を出すから返してくれろと、ゐ詫をした迚、アカンベロリン親馬鹿ちやんりん營業屋の風鈴、チリン〳〵と御經の合の手(此下音調靜に引導を渡す趣あるべし)我今汝ゐ地獄の旅立を命ぜ——汝夫謹んで往生せよ

——ポク〳〵

○其二

是い此度新規新版出法題目阿房陀羅經文、其又利益い亞細亞の西方錄

砲談の法螺吹老爺が肝玉引抜き尻子玉引こ抜て、奈落の底へともんぜり切らせて引導渡そこの、肝心要の御經の文句ぞ、抑聞ねへ、日本の大軍ぞし〳〵押掛け、滅茶々々勝さる平壤九連安東秀巖、あらんだ眼の少しも違はず、片足持上げて蹴飛す奉天、續いて繰出す軍の二番手、難なく上つた海岸地方い一人も影なく、さつさと逃出す南瓜の虹虫、眼障る物あくのんきで氣樂で、起よとまゝよ、寢よとも儘よと言たい程だこの、時候が寒くて焚物無くつて、馬糞を燃したにや喚くて困つた、是も軍のならひと諦め、そちこちそる内一番二番と繰出す兄弟、あつそり忍んで砦あひし〳〵よしかな占たと大砲どん〳〵、南瓜の腸挫いで潰して骨さで碎いてざつと附燒寢酒の肴よして見ちやぞふだへ、こいつよかろと跳て飛迯み、四邊をたよろ〳〵見わたす處ぞ何時の間あやら南瓜の拔殼扨も不思議と尋ねて見たらば、金州乘取る鐵砲の響きに、わな〳〵顫へて腰抜して、雲を霞と逃出す抔とい腐つた根性だ、是から旅順と出掛て見よかん、彼奴等い袋の鼠となつたぞ、海にい軍艦をらりと並んで迯道あるまい、渤海灣でも佛の椀でも、隅から隅迄細かにかぢくれ、水雷隱して威嚇なんぞい面かべで屁ぞ出る、糞でも食へと此方で引上げすました物ぞよ、オヤ〳〵何だかすてたゝ響くぞ、鐵砲矢叫びどんちやん騒ぎて泣聲ワア〳〵ソリヤコソ旅順い押へた聖籠ぞ、軍い勝たぞ、豚の尻尾のちやん〳〵頭い南瓜の朝市、彼方へコロリ、此方へコロリ、叩き潰をヒグニヤグニヤ〳〵——

○阿武久陀羅渤海經

阿武久陀羅渤海經——罷出たる和尚の宗旨い、釋迦も達磨も知た事やあるまい、日本の東京で呱々と生れて、東洋の水で產湯を遣つて、世界を横目あにらんぞ眼の玉、亞細亞の隅から亞細亞の隅迄、鞭き渡つて廻る

及ばぬ日本帝國萬歲宗とれわつちゃ開山愛親覺羅ゃ清帝ゃどとれ片腹痛いぞ其癖蜀虫逃るが御好で負るゃ上手で大法螺吹立て老大國とれ御膳ゃの茶沸かす恐れ入たと頭を下げたら免して遣ふが手向ひをるなら北京處か四百餘州を叩いて潰すぞそれに何ぞや何處の猫逃か分らぬ山猿手先に遣りて嬶和の使と拵へ事して、うま〳〵欺罔と其手れ食はねへ汚弥へ根性の豚尾坊主の加勢をする奴ァ獨逃も此奴も搦ふ事ァねへぞへ土手腹蹴破りはんねつけんして引導渡すぞよもや忘る事でれあるめへ朝鮮豊島海の戰ふや軍艦一艘さんさと取られて廣乙仕舞た逃出せ兄きと盲滅法海岸目ゃけて走つさ揚句れ淺瀬えへだぼり運送船にれ多くの豚尾漢船潜ゃ事さへ知らねへ馬鹿者傭つた長人れ日本へ逃込を泣面蜂さとりア〳〵吠出す涙の雨でれ火丸れ消えねへ其間にずどんと大砲一發ぞふ仕樣高陞評議の最中ブク〳〵ブ

ク〳〵と河伯に拔かれた屈玉の樣だぞ夫からこつちへ渤海深く逃て隱れて呼でも出て來ぬ偶々艦隊鼻を揃へて出かけて見たれば日本の軍艦ちよろりと見付てとし〳〵砲擊七千餘噸の甲鐵艦ざと諸つた大船さたゝか擊れて四艘れ沈沒三艘れ火を出し又々大負け旅順も其後取られて仕舞て、どふ〳〵宿なし威海の小灣おた〳〵住居ゃ安宿同樣浮身の軍艦水雷張られて灣口出らを走又もや勇軍上陸なした る其地れ何處ざぞ榮城灣とて二十里前後で威海の砲臺御尻の方からどし〳〵ひり出れ鐵砲玉でれ軍艦處か網の中なる魚形の水雷鎭遠定遠其他の艦迄最期の引導——

○弱虫屁子垂經

——阿弗久陀羅三藐三菩提——

ヤレ〳〵東西御聞苦しい事でれあるども一寸御耳を拜借致して南瓜坊主の身の上談を細かに述べます懺悔の一段毎度毎戰大負小負ゃ敗

北討死、今更いふのも餘計な寢言と皆さん御承知、聞くのも厭だろ言ふのもいやざが、言はねば理屈も分らぬ親父の罪障消滅、戰爭供養の是が御なさけ、抑此度持上る戰ゐや、請合負ると初手から知たら、手出しもなるまい理屈も言へまい、降參素より土地まで取られて償金出すやら威海衛苦勞と世界に笑はる、赤恥さらしてへい〳〵つくばい、平蜘見た樣に這出す其狀、見らるゝ風俗でいあるまい抔とい、皆さん言ふだろ、自分もさうゞと極てい居たれど、四百ゐ餘れる大國抱へた二歳の南瓜ゐ、身の上ぐる〳〵胡魔かしてねくるわつちゐ性根い馬鹿げたものゞよ、奇鴻章とい名ばかり大騷、されど其時や威張るゐ勝だと、袁世凱めに一ず耳打ち、おつと承知と受込む目論見、夫なら大丈夫、朝鮮屬國此方の物だとにまして居さらば、中々手強い日本の談判、大鳥公使ゐ契と伸して羽叩き一聲、閔泳駿等の叛反の輩も、食ふや食はずの島へと流さるゝ事

爲す事鵜雀の嘴ふる〳〵厭ざと思つたなれども、今更退くにもひかれぬ魂膽、最一つやつたら勝つかも知れない、未練に一番當つて碎けと、成獸牙山の敗北懲きに、二萬の兵卒掃出す左賓貴、鴨綠大同天險要害、來るなら來て見よ小指の三番叟と持病の傲慢、ひゞ臂張たる戰の始末ゐ、ぜふざと言たら鼓にやならぬい、うま〳〵取られて、九連城でも鳳凰城でも風を食つて尻よ帆かけて逃出ぬ兵卒、其時日本の軍人談い、何と言たと尋ねて見たらば、豚尾坊主め弱い奴等だ、鐵砲一發はなさぬ其間に、最期の屁玉を空氣ゐふつけて、ドロンと消えたる蛆虫坊主と言たかぞふたか、慥に聞かねど、言たに違ひあるまいなんぞと考へ見たらば、身體がぶる〳〵齒れ根ゐがた〳〵、此先軍いぞふなる事かと、天津老爺い思案の腕組、胸いむしやくしや心いもや〳〵。彼是する内二軍の上陸、大連ぶつ取り金州滅茶々々、旅順もしめこの兎となつたぞ、逃ても逃付く事

でいあるまい今ゐ見あせへ北京の店たて、拵へた財産持て行脊負て行、南無参た――〳〵

○黄海阿陀佛經

抑讀上ざしたる佛經の文句い、是を何だと申さうならば、今更役よも立ない後悔、阿陀佛經とい、わつちゐ懺悔の因果の寝自だ、利益も糸瓜も何にも無けをど、南瓜の亡者が浮んで來るかと、身びゐき半分叩き出しゑる木魚の一盤、せめて皆さん哀と思はい、夫ゐ何より功徳万徳、御聞若しれ處い御用捨、しばし虫唾を堪へて下さを、頃い九月の中六日、平壤加勢と積出す南瓜の兄弟分なる慈姑の頭を漸く陸上げ、ヤレ先安心、日本の大敵來ね間よ走をと、甲鐵艦やら運送船やら、海洋島邊をゐつさらもつさあキヨロ〳〵眼で見廻そ我先、日本の軍艦荒濤蹴たてゑだん〳〵近寄る、こいつ仕舞た、逃ても隠れる處いあるまい、斯ふれふ時こそ弱ミを

見せていならない事だと、猛逸の客將漢納根先が鬣みの一言、それもさうゞと考へ見たれば、七千餘噸の大艦二艘よ、打勝つ敵艦世界にあるまい、況て多くの甲鐵戰艦、心配いらぬと向つて見たをば、日本の海軍案外強くて、赤城の小艦中〳〵手剛く、比叡の木艦稲闘勇戰、松島旗艦の大砲命中、一々愕り再々がつかり、忽ち四艘い千尋の藻屑と往生阿陀佛、わつち等兄弟勇氣いひよろ拔け、睾丸さし込み胸へとぎつくり、ひき出す眼玉は、豆鐵砲食つた土鳩の樣ざよ、又もや突來る其船何だと認ひるひまさへ、荒浪逆まき勢ひ尖く、ヤレ〳〵危あい、衝突されていい軍艦たまなし、避けるにしかヒと左右に開いて通して見たれど、西京丸とか運送船とか、案外容易敵だと周章て、水雷發てば船底いき拔け、彼是そる間に雷轟く大砲とし〳〵、定遠目ゐけて爆烈一聲、見る間よ船火事、烟い颯る炎は沼るやつどの事ゐて消したいよけれど、又もや三艘味方の軍艦、撃て毀

されば淺瀬を乘上げ、最早かあはぬ此場の有さま、逃ろや逃ろと我勝走りて、渤海深くに小さく縮んで、潛んでしまつた、南無黃海阿陀佛經ブン〜〜〜

○東蒲塞羅經

實說――東蒲塞羅經――今度此度持上げた戰の事の起因を何たといふたら、天津老爺が朝鮮助けて叛反の東學、鎭める樣りの手段の罠ゐハはまらぬ日本、此奴しまつた、うかつゐや居ゐれば、兵隊繰出せ軍艦漕出せ、負てハならぬと牙山の上陸、成歡驛よも人數を繰込め、葉羅親分しつかり賴むと、力の拳も固めた甲斐なく、日本の勇氣よゆしく〜やられて滅茶ゐ潰され、おまけゐ取られた軍艦一艘、殘りハブク〜、鰐のれ腹へまんまと丸呑み、淺瀨ゐ乘るやら加勢ハ逃出す、ソコデ今度ハ陸から巫押し、二万の同勢籠つた處ハ、要害堅固ゐ抱へた山道、背水氣取りて大な

な河水、越たる奮發出かした樣だが、逃るに上手な豚尾坊主ハ感心致さぬ、飯の上なる蠅より臆病、撃て掃へばわつと泣出す、負るハゐ極りさつさと打出せ大砲小銃、ゆし〜ちきれよ東蒲塞の頭と、劍をかざして向へば滅茶々々、要害堅固の牡丹の臺でも、見る間にぐづ〜、石垣飛越え開いた扉ハ玄武の城門、スハコソ崩せと突込ひ銃劍、日本の勇氣ハ鬼でも叶はぬ、山谷突拔き、雷風晴で大風吹まき、息をもつかせずんづと攻來る、滿州騎兵の五百の白馬、眞赤に染つて忽ち往生、大同下流の鐵島渡りし師團の本部ハ、敵の横腹ぶち貫く勢ひ、正面背中も日本の勇軍、袋の鼠のそつ首引拔た、しめこの兎の逃足捕へて、爾汝貴敗走左寶貴討死、軍ハはたさと天津老爺ハ鼻毛をむしられ、糞汗流して運んだ兵糧、一粒食はせに日木の分捕、繪て取られた九連鳳凰、昧方ハくたばる彈藥なくなる、其間に黃海戰ゐの持上る、揚威ハブク〜超勇阿陀佛、來遠致遠の蓋

茄子南瓜も、魚の餌食よバク〳〵やられて、龍宮豊年北京へ饑饉だ、何の因果か是でハ堪らぬ、日本の小國馬鹿にしたのゞ報つた身の上、李鴻章とハ名ゞかり剛義で、間抜な老爺と世間よ笑はれ、佛關西談判英吉利掛合、腸ひしらぬ臓腑ハ忍やられ、失敗始末ゞ北京へ聞えて、勳章取られて御眼玉頂戴、彼方へ首譯此方へ御詫ど、一つの舌べろ二枚に遣つて瀬々息つき、是から工夫ゞ肝必要となない智恵ふつても出るのハ冷汗、吊し上つた罪丸掴んで潰して死なふか、イヤ〳〵死でハ命ゞなくなる役人廢よかあいつもつまらぬ堅日から食へない、降參しようか頭を下げよか、赤耻かくのもわんまり好ない、よし〳〵工夫ハ付たぞ、渤海氷りて北風吹出しやあっちの物だぞ、夫迄堪へて大法螺吹くのゞ最上分別、何のかのとて譫言並べて燒酒一杯、ぐつれり寢込んで寢言の溜息、又負けだ！

〇分捕經

おん東浦塞――馬鹿者ダ――ボロ〳〵扨ハ東西申上ます此又坊主ゞ御經の次第ハ、豚尾漢征伐分捕經にて、途方とてつも無い法螺吹た る支那から渡つた韓唐太皷や豚切庖丁、銅羅や喇叭や古はげ帽子に、竹槍なんぞを並べた言立、入札させても二束三文價値ハあるめへ、龍の旗やら、百足の旗やら、しかつめらしくも大きな字を書き、陝甘漢語の分ら ぬ處ハ、立派な積りか知らねへけれども、ぼろけた狀見ちや、組屑拾ひも買ふ氣ハ出るめへ、側よしよば〳〵兩袖ぶら下げ、胴中ちぎれた着物ハ何だと、尋ぬて見たらば、朝鮮官妓の上衣ださうだよ、偖もうつけた間抜の親玉、戰に出るのゞ女を抱へてドンチヤン騒いで、ズトンと撃いた鐵砲玉にゞ、肝玉ひしやげてはう〳〵の體にて、這出し逃出し女の姿で漸々落延び、負た褒美を貰つた馬鹿とハ魂消た談だ、日本ハぜし〳〵勝て

い分捕り撃てい生捕り、大砲澤山小銃あるぞへ、兵糧弾薬一年遊つて中〳〵耗らねへ、天幕なんぞもしこたませしめた、まだ〳〵あるぞへ、軍艦三艘、滊船と帆前で二十と一艘、お錢い澤山福々長者ぞ、こんなお取ふれてどふそる積りか、邪氣奇面してノヤ〳〵出て來る兵士といふのもちやんちやら可笑い、馬鹿の根本間抜の極天、貼る藥いあるまい抔どい、思ひの外なる考へ違ひだ、能々尋ねて聞た處ぞ、どふせ戰ふや負るい當然、其時や日本へポク〳〵御辞宜で、命ばかりい御助け下さい、なぜ〻めそ〻々空泣したなら、俘虜とやられて、餅も食へるし浴場も遣へる氣樂な見物、何と横着極めた奴等ぞ、今度降參した奴あるなら、珠數に繋ぎて刀の串ざし、西の海へと惡魔掃ひゐ投ても遣りねへ、兵器や米類分捕するのい此方の德ざぞ、生た絲瓜の分捕あんぞい、餘り出かした談であるめへ、さりさ持て來い背負て來い大砲弾藥、さりさくたばを横着坊主め、劍の

山へと往生陀佛——

○豚尾漢泣虫經

ヤレ〳〵皆さん聞てもくんねへ、今度負けたる戰の始末を尋ねて見たらば、出し抜け上つた日本の大軍、華國の河口の遠淺續きに、ぞし〳〵群る膚に愕然、お百い逃出す人家い空居、忽ち取られた九連街道、威海心配ぞふそりや宜ろと、うろ〳〵漂ふ北洋艦隊、怖氣の付たる南瓜の頭が此時居たとて何ゐもなふないそ其間にとふ〳〵大軍一ばい、最早是でい防ぎにやなるまい彈藥よしかな、空腹ないかへ、積だる兵糧有たけ食つてしこたま糞たれ、片足進で片足退き、負ても勝たと知らせてくれろよ、死でも命い拾つて逃出せ、夫や來た大砲、又來た吶喊、袋ぎの大事の大連潟だよ、しつかり頼むぞ、兄さも弟も唐茄子頭を、すつ込め打出せ、何の彼のとてゴタ〳〵ヤ〳〵、ソヤコソぞん〳〵飛來る大丸、小銃ぱち〳〵畑

は眞暗、身體にひよろつく魂飛散る、劍の山やら火炎の車や、血の池地獄に見る間に出來たぞ、已に死ざかぞふしたか、鼻とつまめば息が有り、瓦をつめれどあいつたよ、死なねば命が有まいか、偖も怖いやふそろしと、後振向く其間に、皆に潰をる膿魂逃げる、和尚の砲蓋お陀佛陀佛、大連灣口まんまと取られて、水雷敷設の繪圖面奪はれ、お金を遣つて出かした仕事も役に立つ事一つもあるまい、抑此灣防ぎの砲臺建築、九年掛つて漸く此頃、出來たてほや〳〵、二十四珊知克虜砲やら、加農砲やら、並べて据たる其數幾らだ、七十餘門と確に思つた、權兵衛も八兵衛もしつかり聞ねへ、安い御金で出來なに物だよ、我々兄弟大勢居たとて何よもならない、貧るは元より分つた事だが、其日稼ぎの賃錢貰つて、厭とも言れぬ、とふ〳〵貧たご命に拾つた、夫でい逃よか、天津親父が言譯聞くやら、夫とも殺すかうかつにや行れぬ、待々工夫が付たぞ、日本よ向て降參すべしど、己の兄きも日本へ捕はれ、三度の御飯をたらふくへし込み、御錢に遣へる運動にや出らをる、遊んで暮して身體に安樂、ッコヂ御壽命万々歲なら、こんな極樂何處にもあるまい、地獄で佛に今度の戰爭、早く貧るが自分の德だぞ、何のかのとて譫言吹出を頭の上からズドンと一發、出し拔け食つて、うんとのめぞる最期れ、屁の玉、虛空を掴んで、お陀佛陀佛〳〵〳〵

○惡魔退治茂賢經

又貧けだ——ペッカッ經——抑始まる御經の次第に支那滅茶閉口へコタレ文句で、夜行の百鬼を退治の神軍、隊伍を整へて押出す其地は、劇鮮京城一揆の奴ばら、蜂々迫りて竹槍鋤鍬、全羅の一道まんまどしめ込み、鎭撫の役人手出しもならない、夫でも閔族まだ夢覺めぬ、愛に始めて持上る魂膽、仕出かれ妖物、何よと聞たら、北京政府の眛昏摺用人、李鴻

お手先の出稼ぎ番頭、衰世凱めと悪事の相談、朝鮮助ける一揆ゝぶつち
め、可愛や屬國此方の物だと、深切ごかしゐ強慾かはいて、日本と侮り自
分を亢り、兵隊繰出し南瓜を積出し、安城流をの橋桁斷切り、威張た風俗
出がした樣だの、吶喊銳き日本の軍勢、彈丸飛して跳つてはねまみ、俄造
とれ砲臺ぐつ〳〵、崩れ出して一歩も堪らぬ、成歡忽ち牙山の本營、共
々潰へてすた〳〵逃出し、ソコデ始めて韓廷改革、院君入闕、閔氏ゝ遠島、
開化の舊臣漸く芽を出し、事大の賊黨忽ち埋沒、李爺の目的ごらりと變
つて、うかつゐ出來ぬと、又々募つた日備の兵卒、其態狀ぞふだと聞て見
よなら、提燈ぶら下げ傘背負付け、面桶口鍋御供と出かけて、鐵砲有ても
打事知らねへ、刀ゝ提げても生憎切れねへ丸で鳥羽繪の引越なぞとゝ
一寸見て分つよ、此又馬鹿者掛引する奴ア、烏が孔雀の眞似した扮裝、表
面を飾つて根性が腐つて、痩馬跨がり、兩眼あをぞも節穴同樣、耳ゝあを

ぞも糊げた木耳、鳥籠持せて、戰ゐ出るとゝ、馬鹿か腑抜けかさも無ひや
發狂、大將なぞとゝ片腹痛いぞ元山枝隊はぞし〳〵乘込み、朔寧枝隊も
ずん〳〵押寄せ、本隊中隊一度ゐ吶喊、如何に呆痴れ豚尾坊主も、平氣の
平壤ですまして居られぬ、たとへ兵器ごの澤山ゐるとも、險岨の要害扣へ
て居るとも、戰の極意ゝ膽玉一つだ、一粒選なる日本の魂瑠璃も琥珀も
及ばぬ光りよ、射られて挫げる豚の死肝、百万ありとも千万ありとも、迎
も追付く事でいあるめへ、されば忽ち平壤落城、逃出す支度ゝ皆さん御
上手、昨夜の寢言の足しまへ聞たら、豚尾漢ノー九逆城、氣が氣玄やない、
豚ゝ這々ドロックドン、お前お負で一目さん、逃るごの御好でトッピキピ
イノピイー、夫から舞込む風凰城でも、風を食つてサッサと高飛び、大孤
の山の沖合眺めりや、旭ごさらつく魔ごの羽叩く、龍ゝブク〳〵お土左と
成さぞ、遼陽魔天もパッタリ暗黑、旅順の妖怪鎮定安穩、惡魔ゝ降伏亞細

亞ハ太平、唯我獨尊東洋神國ガク〳〵〳〵

○豚狩阿房陀羅經

頃ハ明治の二十と七年、六月初の事でも有たか、悶着起つた亞細亞の雲行、亂れた處ハ野蠻の朝鮮、叛反を始めと一揆の徒ハ、東學黨とか田樂黨とか、政治の不服に燒腹起して、鎮撫の役人忽ち串ざし、滅茶々々に味噌付け、加勢ハどん〳〵、火の手は滔る。ソコデ豚めが嗅出し嗅付け、鼻息荒く也法螺吹袁世凱、道しちやならぬと朝鮮丸呑を、御爲ごかしに救つて遣らふと、胡麻摺て味噌摺て閔氏に焚付け、朝鮮八道悔中ゐ入んと謀つた注文、ぐわらりとはづをて閔氏ハ遠島、羽をのす大鳥鶴、瞑一聲、集る野豚ハ牙山を這出し、跡から積出す千餘の豚めハ、豐島沖にて魚の御馳走、ソコデ今度ハ山河渡つて、ゴタ〳〵〳〵ワヤ〳〵集る平壤、門口固めて流れをひかへて、是ゐら安心、虎でも獅でも勝手に來なせへ、なとゝ平氣ゐすまし

た處の、牡丹臺からガラ〳〵ピッシャ、雷落たゞ、ソリャ、コリャ堪らぬ、軍旗も拋とけ、鐵砲も打棄れ、逃出せ、駈出せ、命ゲ大事だ、ズドンとやられて地獄へ行くより、逃て褒美と貰ふゐ得だよ、我も〳〵と逃るが上手で、滿州要地ハ忽ち取られた、又もや繰出す第二の豚狩、金州旅順もゐグチャリと潰して、ブウ〳〵吠出ル野豚の逃亡、海にや行がれぬ陸ゐハ大軍、眼ハへこつく眼玉ハうろ〳〵、胸ハどきつく手足ハひよろつく、風ゐ吹ても鳥ゐ飛でも、鐵砲玉かと魂奪はれ、此世で地獄ハ今度の戰だ、夫に何ぞや旅順に出かけた稼ぎの俳優ゐ、日本の勝利と喜び褒めたて、トンツルチャンチキ、踊りて舞つて飛ではねたハと思した。だへ、夫是考へ、前後見廻し、自分で自分と恨んで見たらば、支那ハ滅亡日本ハ福々、英吉利燒もち、露西亞は尻餅、三色の牡丹餅黃粉にあんこで、でつちて丸めた、豚いよ〳〵雜煮とやらをて佛々沸へゞよ、獨逸も此奴も我勝食つてたら

ふくやらかし、十と八省山谷崩して、地形を平均して國に開墾古ゐ野豚ハさらりと根絶し、新規に豚飼つて側から鐘詰、世界へ輸出とやらかす相談、問屋ハ日本で賣先や英佛、露西亞や獨逸や亞米利加濠洲、到る處に得意ゞのあるとハ歐米輿論ゞの荒増極つた、若も左樣なりや我々仲間の大豚小豚が膽魂抜かれて地獄の宿替、先祖の亡者ゞの定めて立腹、何と言譯ない〳〵つぶろの角出し槍出し呵責の折鑑、亞細亞表の、喧嘩あや負るし、女房あや泣かれる子供ハ餓死ぬ、森の河原で拾つた小石も榴散彈と

ハ愕然仰天、婆婆の景狀今頃どふだと、電信叩いて便を聞した、其又電報受取る婆婆でハ、豚の宰相李老爺あんぞゞの内閣集會、明ても暮ても小田原評議で、威海は取られた太沽は突れた、北洋艦隊俘虜となつゝぞ、南洋艦隊壁足となつたぞ、土地ハそがれる兵器ハなくなる、御金ハ欠落仲裁斷り、肩身ハにぼまる、畜命ハ縮まる、生て居るのも吹草の息抜、ふいらふ

いらと虛空を掴んで、青筋出しても冀汗かいても、戰に勝つとは思ひもよらねへ、和睦の頼みも聞くかどふだか、迚も承知ハ覺束ないぞへ、其間に北京はメドンと地ひいき、彈の霰や劍の雨降る、修羅の巷の焦熱地獄と、打て變つた此世の景狀、豚の火炙り慈姑の丸燒、因果往生本來一物無し――ポク〳〵

○馬鹿般若馬鹿見多經

ヤンレー東西蛆虫退治の御祈禱御祈念、ヤヤブヤヤ〳〵ブと一心不亂に喋る次第ハ、一朝一夕細に言へない、事の起因の火の元尋ねりや、日本の對馬と妹脊の小國、一人娘のお朝とやらゞ、世間見さにも育ち上つて、其日〳〵と送つて居たをと、時節ゞ變れば世の中開ける、文明智慧ハ頭を持上て、因循姑息ハ尻尾をすつ込む、隣近所の交際なんぞも、オラヤダチーとハ今更言へない、サレドお朝ゞ身體は、祖先傳來魅入た蛆虫、何處

から沸出て何處から這出た隣のおばさんお支那の内から往たり聞たりで絶たる事なく、お朝も亦其蛆虫大事に、言ふ儘氣儘に下へも置きねへッコデ神功征伐し給ひ、秀吉清正虫狩始めて荒増退治た、サレド中頃隣のお支那は身代限りで、二度目のお支那が乗込此方めつそう豚飼ひ、下女のお鴻やお袁よ言付け、お朝が屋敷へ勝手氣儘に豚を追遣り、沼る蛆共ハ我儘一杯、お支那はッロ〳〵近所の交際始めたけれども、お朝ゐ出稼ぎ少しもさせない、ソコデ日本ゐ義堅いお國といふ人出て來て、れ朝の身體の蛆虫掃つて、自由の權利を授けてやらんと、談判したのは明治になつても度々有たが、お支那ハ法螺吹き、豚の眨面ブー〳〵怒つて、何でもお朝ハ此方の者だと、うまくせしむる積で有たゞ、お國の勇氣にへこたれあくたを、兵器を捻くりとゞんゞ踏ゞお、船と取られる伸間は討るる、逃てひよろけて降つて往生、お國ハ微笑、お陸とお海の二人の婢女に菜箸持せて、弱虫毛ひし狹んで捨ろと、命と傳へて、ちよい〳〵つまんでちよい〳〵潰して、今でハお支那の門口、旅順の奥迄蛆虫掃つた、是から北京の豚小屋毀して、毒虫撲滅近きゐあれども、ソコまで喋るは眞言秘密の、御經であるから、御初穂次第で又々御祈禱、馬鹿般若馬鹿密多

支那征伐呆痴陀羅經 終

明治二十八年二月十一日印刷
仝　年二月十七日發行

編輯者　夢廼舍現

發行者　吉澤富太郎
本所區松井町三丁目十九番地

印刷者　宇都宮榮太郎
神田區花田町一番地

版權所有

特11
9

091791−000−2

特11−9

支那征伐呆痴陀羅経

夢廼舎現／著

M28
DBO−0306